相模経済新聞　2018 年 3 月 10 日号

そして、地球環境核戦争が始まった

北里環境科学センター
理事長／宇宙生命学者　伊藤　俊洋

11

宇宙生命哲学という概念

明日で3・11東日本大震災から7年になる。人類は今、文明の大きなうねりの前に立ちすくんでいる。①地球規模での気象の異変、②資源問題、③人種・人権問題、④様々な偏見によるテロやポピュリズム、⑤人工知能、⑥経済格差、⑦情報化社会、⑧国境紛争、⑨宗教戦争、⑩核兵器・核エネルギー、などなど。これらはどれを取っても目がくらむ様な難問であるが、その多くは、人間の深層心理に潜む制御の難しい欲望に由来する。

そもそも人が生きてゆくことの意味、人間社会で個人が果たす役割、未来の子供達に託す課題、人生を爽やかに生き抜く心得。これらの課題を総括的に議論し、解決策を紡ぎ出すためには、文明の指針となる新しい哲学が必要である。その哲学は、子供から高齢者まで全ての人たちにとって、また、全ての国の人たちにとっても容易に理解できる内容で、普遍的なものでなければならない。

この難問に向き合おうと、本紙でこの1年間、10回にわたって連載を続けてきた。それは、宇宙から地球を見ること（9月10日号）、自然現象・生命現象を原子論的（5月10日号）に考察することである。この手法で冒頭の10項目を俯瞰的に眺めると、①から⑨のテーマは、原子論的には電子雲に関する問題で、⑩だけが原子核に由来する問題である。ここで最も重要なポイントは、生命現象は電子雲の世界で循環していると捉えることである（10月10日号）。歴史的には、人類はやっと電子雲の入り口に辿り着いたばかりで、その奥に潜む限りない可能性については十分に理解していない。人類の文明の未来は、依然として電子雲の中に隠されていると断言しても過言ではない。

人類は今、原発問題に対してぼんやりとした不安を抱き始めているが、それを直視しようとしない。この新しい地球環境核戦争の本質が理解できれば、冒頭に述べた⑩以外の文明の危機など物の数ではない。少々逆説的であるが、原発問題が、地球生命史上最悪の環境汚染であるという認識を人類が共有することにより、我々は、新しい哲学に基づくパラダイスをこの惑星の上に創出できると信ずる。それを目指す心が「宇宙生命哲学」の本旨であり、「素敵な地球人になる練習」の勧めである。福島第一原発の事故を経験した私達は、人類の生き方を大きく変える機会に対峙しているのである。次回から、この「宇宙生命哲学」を主題にして更に論を進める。